おたすけ観音（かんのん）

登場人物

ナレーター

洞源（どうげん）

洞源和尚（どうげんおしょう）（子（こ））

母（はは）

観音様（かんのんさま）

戦友（せんゆう）

幸吉（こうきち）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

綾瀬市寺尾にある報恩寺は慶長七年（一六〇二年）、今から四百年以上も前に、曹洞宗の寺院として開かれました。そして、四世、廓山怡舜大和尚の代（一六五〇年）に御朱印八石を賜り、境内坪数は一万八千坪、建坪二百五十坪であったそうな。（現在は八千四百坪）

後に二十七世太嶽洞源大和尚となった和尚は、尾張の国（現在の愛知県名古屋市）に生まれ、幼少のころより体が弱く、四歳のころに隣町の曹洞宗龍潭寺という寺に預けられることになりました。

和尚（子）「おっかあ、おらどうしても寺さ行かなきゃならんだかぁ？」

母「どえりゃすまんが、ご先祖様供養のためだで行ってちょー」

と言われ、泣く泣く寺に向かうのでした。

当時、この地方では先祖供養と称して、男の子を寺に預ける風習があったのです。そこでは、お経だけでなく、書はもちろんのこと絵の手ほどきも受けられたということです。

二十歳になった和尚は、日清戦争後の反乱軍を鎮めるため、台湾に出兵しました。

観音さま　ある朝早くのこと、奥深い山の中、清流ほとばしる滝の前で一心に祈りながら坐禅をしていると、滝の中から観音さまが現れました。

同源　「洞源や、無心に祈ることは力となる」

と言われたような気がして、自分には観音さまがついているから敵の弾にあたることはないと感じたのです。

「観音さまありがとうございます。ありがとうございます」

戦友　このことを戦友に話したところ、

「洞源よ、おまえは夢でも見たのではないか？本当に観音さまがついているとでも思っているのかい？」

同源　と、からかわれながらも、

「信ずるものは救われる」

と、一向に気にしませんでした。

同源

幸吉

激戦の末、多くの戦友が亡くなっていきました。しかし、観音さまのご加護のおかげか、運よく帰還することができた洞源和尚は観音浄土を祈願しながら修業し、帰山後、大正九年、三十歳になったとき、報恩寺住職として迎えられました。

報恩寺住職となった洞源和尚は、このありがたい観音さまの教えをひとりでも多くの人に広めようと一念発起し、絵心のあった和尚は心をこめて観音石像を彫り上げるのでした。

「めったやたらに叩きますから、観音さまだけ残ってください」と、玄翁と石用のノミを使い観音経を唱えながら彫刻を始めていきました。

二体、三体、五体と彫り進んだある日のこと。近隣の望月石材店の幸吉さんがやってきて、ちょうど出来上がった観音さまを目にし、思わず息をのみました。

「なんと美しく優しげな、心穏やかな観音さまだろう」と、見入ってしまいました。

幸吉

同源

和尚が、一念発起の理由と寄付や浄財で賄うことのままならぬ事情を打ち明けたところ、

「和尚さま、私にもぜひ手伝わせてください」

と、申し出るのでした。

「何ともありがたいこと。これも観音さまの思し召し。ありがたや、ありがたや」

和尚は喜んで協力を申し受け、読経の中にふたりして共に玄翁とノミを振るい、その総数は二五三体にもなったそうな。

第二次大戦中になると、弾除け観音として全国的にも知られるようになり、「相州おたすけ観音」とも呼ばれ、大勢の祈願者が押し寄せました。洞源和尚の観音さまを描いた絵を身につけていると、弾にあたらないという話が伝わったのです。

海老名駅からの道は観音道とも呼ばれ、旧二四六号線沿いに現在も道しるべが残っています。

弾除けとしての信仰は時代とともに自然消滅したものの、二度とあってはならない戦争を思い起こし、平和を祈るおたすけ観音として今も報恩寺にたたずんでいます。

また、洞源和尚は日々の暮らしの中に役立つ唱として「おたすけ観音数え唄」を作られました。

人々の生きるよすがとなりましょう。

一つとや　人は神の子仏の子　これを悟るが第一よ
二つとや　不幸も徳も種次第　良い種選んで蒔きましょう
三つとや　皆で励んで働いて　立派なお国を作りましょう
四つとや　喜ぶ門には福来る　腹立つ時にも喜ぼう
五つとや　いつもニコニコお日さまを　拝んで人を助けましょう
六つとや　むかっと怒れば火が祟る　火の用心と拝みましょう
七つとや　泣くのはやめましょう蜂が刺す
八起きだ陽気に立ち上がれ

八つとや　病と怪我はせぬように　何事するにも油断なく
九つとや　ここが辛抱のしどころだ　ここ十年頑張ろう
十　とや　父さん　母さん　家内中　丈夫でニコニコ極楽だ

綾瀬市報恩寺　第二十七世住職　加藤洞源師